慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小幡篤次郎考 I : 書簡にみられる中津士族社会との関わり
Sub Title	
Author	西澤, 直子(Nishizawa, Naoko)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2000
Jtitle	近代日本研究 Vol.17, (2000.) ,p.139- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20000000-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第十七巻（二〇〇〇年）

小幡篤次郎考 I

――書簡にみられる中津士族社会との関わり――

西澤直子

一 はじめに

小幡篤次郎は、福沢が深く信頼した人物のひとりである。彼はあらゆる面で福沢を補佐した。慶應義塾をはじめ、出版事業、交詢社などいずれの運営も、小幡なしでは考えられなかったといっても過言ではない。にもかかわらず、彼について顧みられることは少ない。充分な著作があるのに未だ著作集は出版されず、また伝記は、小幡の遺言によって建てられた中津市立小幡記念図書館が作成した数ページのパンフレット、『小幡篤次郎先生小伝』（大正十五年）があるにすぎない。『慶應義塾五十年史』や『時事新報』（明治三十八年五月十四日より「小幡先生逸話」の表題で十回連載）は、彼にまつわるいくつかの逸話を紹介しているものの、詳しい年譜となると明らかに

されておらず、それゆえ小幡に対する評価は、漠然と福沢の「女房役」としてのものに留まっている。

本稿では、筆者が現在までに知り得た六十余通の小幡篤次郎書簡のうちから、まず中津士族の帰農商や養蚕製糸業に関する五通を取り上げ、彼の活動の一端を紹介する。同人の書簡は『福沢諭吉全集』（岩波書店、昭和三十三～四十六年）に三通掲載されている程度で、従来あまり知られてはいなかった。しかし、鈴木閑雲宛が福沢記念館（中津市）に、山口良蔵宛が慶應義塾福沢研究センターにある程度まとまって所蔵されているのに加えて、平成十年から行っている『福沢諭吉書簡集』編集のための書簡所蔵調査の結果、福沢書簡を所持している旧中津藩関係者宅の多くは、ともに小幡書簡も所蔵していることがわかった。それらの書簡は、結婚や子どもの誕生といった小幡の私的な年譜がはっきりしないために、発信年の推定が困難で、そこから直ちに行動の全容が明らかになるとは言いがたいが、小幡に関する情報は格段に増えたといえる。今後集積された情報を分析することによって、彼の業績に対し、単に「女房役」という表現に留まらない正当な評価を与えることができよう。本稿では第一歩として、中津士族社会との関わりを考察する。

二　小幡篤次郎略歴

書簡を読む前に、必要と思われる小幡の経歴について、『慶應義塾五十年史』（慶應義塾、明治四十年）『小幡篤次郎先生小伝』（財団法人小幡記念図書館、大正十五年）『小幡英之助先生伝』（今田見信、小幡先生伝記刊行会、昭和十五年）『慶應義塾歴代役職者一覧』（慶應義塾塾監局塾史資料室、昭和五十五年）から知り得る限りをかかげておく。末尾の年譜を参照されたい。なお、出典は各々『五十年』『篤次郎』『英之助』『歴代』と略して付した。

小幡家は豊前中津藩の家禄二百石取りの上士であったが、長男である篤次郎誕生前に、父篤蔵は藩内の政争に巻き込まれて隠居を命ぜられ、天保十三年（一八四二）の生誕時には、既に服部家より養子に入った孫兵衛（妻は篤蔵妹あき）が家督を嗣いでいた。篤次郎は野本白巌や古宇田姑山について漢学を学んだのち、藩黌進脩館で教育に従事した。

彼が進脩館の教頭となった頃、七才年長である福沢は二度目の洋行であるヨーロッパから帰国し、藩から築地鉄砲洲中屋敷内の五軒長屋一棟を貸し与えられて、英学教育を始め、より本格的な学塾運営を目指していた。そして自分の片腕となる人物が欲しいと考え、元治元年（一八六四）三月母に会うため郷里中津に帰省した際、優秀で堅実な青年を連れかえることができないかと知人達に相談し、その候補となったのが小幡篤次郎であった。しかし篤次郎は漢学を学んでいたため、洋学を学ぶことに抵抗があり、また既に父が亡くなっていたので母をひとり残して江戸に出るつもりもなく、福沢に会うのを避けた。そこで福沢は小幡孫兵衛の実兄で、かつての師でもある服部五郎兵衛らに相談し、何とか篤次郎を説得した。篤次郎は後年、「余は一家の事情にて、上京し難かりしかば、努めて先生に面会するを避けしが、伯母の宅にて図らず先生に邂逅し、江戸にて書生の餓死せるを聴かずとて、強て勧めらるゝ侭に、即ち始めて東上」（『慶應義塾五十年史』）したと述べている。その後福沢は「養子の口を餌に」母親を説得し、半ば「誘拐」（『福沢諭吉伝』）するように、篤次郎と弟の仁三郎を六月の帰京時に同道し、慶應義塾に入学させた。

入塾した小幡兄弟は、福沢の期待通り力強い協力者となった。篤次郎は慶応二年（一八六五）には既に塾長を務め、同年幕府開成所の英学助教授（二等教授）も兼任した。『時事新報』明治三十八年五月二十九日号の逸話記事によれば、開成所への採用は「試験を受けて合格したる次第にて、開成所にて教師を採用するに試験を行ひた

るは、此度が初めなりしと云ふ」とあり、また「先生兄弟（弟仁三郎も共に勤務）は、生徒の質問に応ずるに懇切なりしのみならず、原文を解釈して理義甚だ明白なりしが為、生徒は自然先生兄弟の前に集まるもの多くして、一人の質問者の後には又必ず両三人の質問者ありて殆んど絶え間なく、他の諸教授のテーブルは甚だ寂寞にして、寧ろ気の毒の様なりしと云ふ」（句点は筆者）とあって、彼の英語力を窺い知ることができる。慶応四年には最初の著作となる『英文熟語集』を仁三郎と共に著した。

その後の小幡篤次郎は、中津市学校で校長を務め、また中学師範学校の創立に際して校務を執るなど、慶應義塾以外の教育機関でも重要な役割を担い、また交詢社の設立に尽力、東京学士院会員、貴族院議員、貨幣制度調査会委員などを務めた。福沢の死後は塾頭となったが、四年後には胃癌であることがわかり、明治三十八年四月十六日に六十四歳で亡くなった。病床で、「自分は何時か一度は避く可からずと信じたる日露戦争を見、又大抵は其結果をも確知するを得たれば、最早此儘瞑るも遺憾なし」と述べたというエピソードが『慶應義塾五十年史』に語られている。

三　資料紹介　小幡篤次郎書簡

［1］鈴木閑雲宛　明治四年？十一月二十一日付

拝復。花墨盥漱拝読。扨先日中ハ度々参堂、御病床を煩し恐縮之至ニ御座候。追々御快復相成り、御出倉[1]之上一昨夜御帰館之趣、就而者帰農商一件[2]も、昨年来之御手続ニて御書面御差出し、御催促被下候由、十分之都合と、乍傍相喜申候事ニ御座候。恵公之御処置、実ニ敬服之情ニ不堪候。昨日分校試験ニ罷越し、昨夕罷帰り、御手紙

拝見。何連昇堂御高話可承と奉存候得共、先ッ御報迄如斯御座候。敬具。

十一月廿一日　　篤次郎

閑雲様

追而服部も坂地より、旧知事公御跡を慕ひ罷帰り候哉ニ承候。左様相成候へは、此度之御処置ニて風波全く鎮静可相成と、歓喜此御事ニ御座候。

〔巻封〕〆　鈴木閑雲様　小幡篤次郎　拝復御親展

注

宛名の鈴木閑雲は、旧中津藩士で天保三年（一八三二）の生まれ。維新前は力兵衛と称し、用人職などを勤めた。維新後明治二年に参政となり、のち権大参事となった。明治五年の藩札交換の際には尽力して、大蔵省の公定率ではなく中津の実情に見合った率で行なうことに成功したという。中津が小倉県下に入るにあたって、同県に登用されたが、まもなく退職した。明治十年には一年間、中津士族たちの互助組織である天保義社の社長を務めている。十一年六月に大分県二等属となったが、郡役所が開かれるにあたって十一月一日初代下毛郡長となった。明治三十年頃一度退職するが、古希を過ぎて再び務めた。四十二年六月歿、七十八歳。福沢は士族のまとめ役として期待していた。三男恒三郎（古河勤務）と小幡の娘えいが結婚している。

①「御出倉」

小倉へ出向いたこと。中津藩は明治四年七月十四日の廃藩置県で、当初中津県となったが、十一月には小倉県へ組み入れられた。九年四月福岡県となり、更に同年八月大分県となる。

②「帰農商一件」

明治三年十一月二十日太政官から諸藩へ、農商業に転業する者に対して資本として一時金を支給することが通達されると、中津藩では士族に五十両、卒には二十五両、さらに禄高五年分を支給することに決定し、帰農商を奨励した。四年一月には第一号として桜井恒次郎が願い出、三月には前藩主である奥平昌服が帰農願を提出したことが呼び水となって、六月までに志願者は百七十余名を数えることになった。

③「服部」

小幡孫兵衛の実家服部家の人物であろう。

④「旧知事公」

奥平昌邁。安政二年伊予宇和島藩主伊達宗城三男として生れ、文久三年奥平家の養子となる。慶応四年父に代わって大坂城警護に加わり、五月家督を相続した。明治二年八月中津藩知事。廃藩後四年末から米国に留学。六年に帰国。十三年には東京府会議員、十四年芝区長（十五年辞職）を務める。十七年肺炎により歿した。伯爵。

この書簡は、鈴木が小倉に出掛けていることや、小幡がしばしば鈴木と会っていることから、中津が小倉県下にあり、小幡が中津市学校の初代校長として中津に赴任している、明治四年十一月から翌年六月までの間と考えられる。但し「分校」を市学校の分校と考えると、市学校は最終的に四十校開校する予定ではあったが、初めは旧家老の生田邸のみで、附属の小学校などができたのは翌明治五年とされているため、少々疑問が残る。

この書簡からは、小幡が旧中津藩内の情勢に強い関心を寄せていたことがわかる。

［2］鈴木閑雲宛　明治十三年一月三十一日

新年之御慶無際限申納候。先以貴家御揃益御安泰可被成、御超歳奉賀祝候。次小生義無常加齢仕候条、乍憚御休意可被下候。

扨昨年滞在中ハ屢拝趨、御懇情ニ任セ長談、失敬ニ罷過候段、偏ニ御寛容奉仰候所ニ御座候。帰宅後直ニ可申上候所、迎年出産等一層之冗繁ヲ控へ、乍不本意御無音ニ打過申候。

一養蚕一条も、別紙之如く備後より申参り、如何ニも好機会ヲ失ひ候段、残念之事に御座候。乍去機会ハ再ひ難訪ものニ御座候へは、先方之言ニ応し、佐藤兄両三輩御諭御越ニ相成候様、小生ニて相祈候事ニ御座候。実ニ一歩ヲ進むと進めざる之際ニ関し候事、是非思召立実望仕候。尚御国表へは、蚕事ニ巧者なるもの一人参呉候様申越候て、機会ヲ挽回するの一良策と奉存候。右御報相待候。

右之外申上度事も御座候得共、不取敢右蚕事一件申上度迄、匆々如是御座候。恐惶謹言。

一月三十一日　　小幡篤次郎

鈴木閉雲様

尚々、時下厳寒御自重専要ニ奉存候。御地ハ殊ニ悪疫流行之趣、恐怖之事ニ御座候。折角御予防有之度候。当地ハ疱瘡悪性大流行、送葬連綿せり。小児等も再種致させ、厳敷相防居り候事ニ御座候。追々ハ御地へも波及可仕候。再種等御用意是所乍序申上候。

帰農商一件も未タ御落着不相成、気の毒なる事ニ御座候。併し堀尾担当尽力故、一ニ之ニ任し置候。何連近々落着可相成と期望此事ニ候。

追啓。佐藤兄え別ニ書状不差出候間、御序ニ宜敷御鳳声奉頼候。福山手簡も御示し奉願候。

〔巻封〕〆　鈴木様　小幡　御口答奉待候

注

①「昨年滞在中」

明治十二年十月二十六日、小幡は「急に思立」中津へ帰省し、翌月二十日頃まで滞在した。（十一月十三日付酒井良明宛福沢諭吉書簡、岩波書店『福沢諭吉書簡集』第二巻、平成十三年）。「昨年滞在中」とはこの期間をさすと考えられ、書簡の発信年は十三年と推定される。ちょうど小幡は十二年八月頃から「同窓会の事を企、昨今略緒に就」（八月二十八日付奥平毎次郎宛福沢諭吉書簡、前掲書）いており、のちに交詢社となる組織の基盤をつくるための帰省であったか。

②「養蚕一条」「備後」

備後には江戸時代、中津藩の飛び地（甲怒、神石、安那の三郡に三十六ヵ村、二万十五石五斗五升八合）があったため、近しい関係があったものか。

③「佐藤兄」は未詳。

④「悪疫流行」

明治十二年八月十三日付の大分県令香川真一宛福沢諭吉書簡（前掲書）に、「夏来其御地の流行悪病」云々とある。十二年にはコレラが大流行し、大分県では予防に失敗した香川真一知事の引責辞任に発展した。

⑤「帰農商一件」

前掲書簡でみたように、中津藩は熱心に帰農商の奨励を行い、百七十名を超える志願者が出たのだが、藩の財政難から士族中三十七名には一時金の五十両が支払えず、また全員に五ヵ年の禄高支給ができなかったため、結局明治八年一月になって士族および世襲の卒八十五名が復籍することになった。帰農商一件とは、その後の

処理に問題が起こっているのではないだろうか。

この書簡からは、中津の養蚕業を盛んにするため、小幡が尽力している様子が窺われる。明治十二年十二月に、中津士族達の出資・経営による養蚕製糸会社「末広会社」が設立された。同社は中津における士族授産の中心的役割を担い、資本金四千五百円の内千五百円は士族達の互助組織である天保義社から出資された。十四年四月に政府の起業基金貸与を受けた際の記録によれば、百七十八名が参加している。末広会社は養蚕では十四年に大分県の繭品評会で一等を得、製糸では年々生産量を増やして、十七年には中津における生糸産出高の約八十六パーセントを占めるに至った。（岩田英一郎「中津に於ける衣料産業の研究」『中津史談』第一巻二号、大分県養蚕販売農業協同組合連合会『大分県蚕糸業史』昭和四十三年）福沢は十六年九月に時事新報社説に掲載した「士族の授産は養蚕製糸を第一とす」（『福沢諭吉全集』第九巻）の中で、十一、二年頃まで中津には養蚕で生計を立てられる者はなかったが、十六年には輸出が十四、五梱に達する見込みになったことを述べている。その背景には、この書簡に見られるような小幡の尽力があった。

［3］鈴木閑雲宛　明治十三年？三月二十二日

二月廿一日、三月四日之朶雲相達盥漱拝読。先以御渾家益御康福奉恭賀候。次ニ小弟義無異罷在候条、乍憚御放念可被成下候。貴答早速可申上之処、殊の外□剽、且左ニ申上候次第ニ延引ニ及候。御海容奉願候。

第一条

帰農商一件ハ望外ニ相運ひ、御同喜此御事ニ奉存候。全く堀尾氏之担当ニ成り候事とハ奉存候得共、其御前度々之御配慮御論破有之候より、終ニ堀尾之憤発ヲ生候次第。小弟ハ親戚朋友之私情よりも感謝ニ不堪、実ニ御厚礼

申上候。

第二条

養蚕一条[2]ハ、斎藤書翰御披見之後、□□之御尋合御相談も御座候所、詰り修行人はづみ悪敷、教師雇候事ハ可被行との御高諭委曲敬承、如何ニも御時情御尤ニ奉存候。右ニ付福山へも可申越との折、幸ひ斎藤、種紙之事ニて内務省より呼出ニ相成り、出京いたし候とて先日相尋呉候。仍而教師之相談仕候処、斎藤言ハく福山之養蚕は士族等多く、本場之如ク農家一般ニ不被行候ゆへ、教師ニ出掛へき人物乏しく、兎ても雇候ならは本場よりハ如何と申被下相成候ハヽ、小田より招きたし、何となれハ何連御地へも修行人差出し度、教師も同様之所可宜と申候所、先ツ考へ可申との事なりしが、其後返報も無之候故、福山より教師を招候事ハ出来兼候事ニ奉存候。尤も修行人参り候ハヽ、斎藤、今又朋友中一人相応多量ニ養候もの有之ニ付、四、五人位ハ何れとも世話致呉候事請合候。御出相成候ハヽ、自然御不都合なく御世話可被下候事と奉存候。行ハ我好まず来るハ彼ニ人なし。誠ニ難堪事ニ御座候。

右貴酬申上度、早々如是御座候。恐惶謹言。

三月廿二日　　小幡篤次郎

鈴木様　侍史

尚々、時下稍や温和ニ相成り珍重之候事ニ奉存候。最早上野桜少し花つき候よし、折角御観娯可有之候。

別紙

義社一条[3]御念書被下敬承。右ハ当地之談合ニては、残金丈ケ市校[3]より持寄之姿ニいたし、義社と協力維持いたしては如何と申ス所より、先便略申上候次第、即今之ヲ抜去んとすれは苦情も可有之候得共、之ヲ抜去らすし

て之ヲ据付奉申、其利害ヲ同ふするの仲間となり候様ニ相成度との存意なり。
右之所ニては御高慮如何思召候哉承度候。尤も存意校〈訴候抔之事ハ決して声立可致存意ニ無之、其段御気遣有之間敷候。

〔封筒表〕鈴木閑雲様　小幡篤次郎　要言平安〔封筒裏〕封

注

①「帰農商一件」
前掲書簡の続きで、無事処理が終わったようである。

②「養蚕一条」
この書簡では養蚕業を修業させる方法について苦慮しているが、明治十三年十一月には中津の子女二十五名（『田舎新聞』十一月十七日号によれば、内士族の子女は二十四名。引率者は西南戦争に呼応して中津で挙兵した増田宋太郎の妻シカであった）が富岡製糸場に入場し、三年後の十六年十二月成業し中津に帰っている。また中津市学校の「市校事務委員集会録事」（拙稿「中津市学校に関する考察」『近代日本研究』第十六巻）十四年二月五日条には、「昨年福島より帰国之女生徒小幡鈴木の両女を、座繰糸取之教師ニ雇ひ入ル、積リ。月給各七円宛ノ積リ云々」とあって、福島県へも修業に出ていることがわかる。

③「義社一条」「市校」
天保義社は、天保年間の藩による借上げに端を発する士族達の互助組織。中津市学校は福沢の尽力で、慶應義塾の協力のもと明治四年十一月に設立された洋学校。設立資金の内二万両が天保義社から拠出された。詳しくは前掲拙稿および「天保義社に関わる新収福沢書翰」（『近代日本研究』第十三巻）。中津市学校は西南戦争ごろ

までは順調で、一時は生徒数が六百名を数えるまでに発展したが、次第に減少し、十二年十二月に市校事務委員会が組織され定期的に会合が持たれるようになると、学校としての発展よりはむしろ、その資産の有効利用に目が向けられた。その結果富岡製糸場入場者への援助や桑苗の買い入れなど、養蚕の奨励にも活用されるようになる。

この書簡からも、中津の養蚕製糸業発展に対する小幡の尽力が窺える。

[4] 山口広江宛　明治十六年四月四日付

時下春暖相催候処、益御清穆奉賀候。過日以来一書拝呈可致之処、多事と懶怠とニて今日ニ遷延、御恕容可被下候。滞留中[1]ハ種々御厚情相蒙り、奉多謝候。

一　桑苗[2]ハ、福島地方寒気甚しく、去月廿六日も一尺四、五寸之積雪、此雪両三日之中ニ解け可申、直ニ堀越へ積廻候事ニ申参り候。着京之上ハ三菱之役員ニ相談仕置候ニ付、直ニ神戸ニ廻し、大龍[2]歟豊国[2]ニて御地へ相達可申候。植付ハ本月下旬より来月上旬迄と申参候。少々御地之気候ニて後過候得共、寒地生れ之桑故、着荷早速御植付被下候ハヽ、間ニ合可申歟。市桑、赤木、真桑抔之苗ニ有之候由、代価等之処ハ后便可申上候。

一　義社之始末[3]ハ、小生愚考之処、旧知事公、先生[4]ニも申上候処、頗る御同意、先生より鈴木氏[4]へ書状も差遣候都合ニ有之候。

一　授産金之事ハ、過日先生山県氏へ被参候節、談話有之候処、積書[7]一覧致し充分尽力可致と申事故、即今是恒を頼ミ御調被下候書類相纏め、先つ十万円斗之積ニ致し申出候趣向ニ有之、将来之運如何哉ハ難斗候得共、空労ニ帰候事ハ有之間敷と、聊か望ヲ属候。

一　桑植付地面ハ何卒御買入被下度、龍王新開[5]も必す適当ならんと申者有之、代価果して幾千ニて手ニ可入哉、御聞合御報奉待候。参河ニてハ海浜新田ニ植付何之害も相見不申よし、慥ニ承り候。

一　星野一条[6]も、廃すれハ損失莫大なる故、一先持続之処ニ試候哉之噂須田氏[6]承り及ひ、御尤之こと、何分御勘考御諭示奉希候。大坂辺何地同様不景気ニ泣居候得共、三菱之船荷ハ少々気方ニ相成候事ニ申居候。

一　銀行条例[7]も出候哉ニ申候。大影響有之候ヶ条ハ、準備金ヲ引上ケ、其丈ケの公債を戻候条なり。此準備金八百万円斗り日本銀行ニ加り候哉ニ申者有之候。

一　福島佐野理八氏[8]より、御地之桑進歩悦び参り、此ハ過日同人より書状有之候ニ付、先年之礼ヲ述、桑之概略申遣候故　尚充分御尽力有之度、自然養蚕有志之男女候ハヽ、一年ニ五人丈ハ、滞留中無費用ニて御世話可申候と申参り候。御心当り之人も候ハヽ、御勧被下度候。

右之条々申上度、尚猪飼氏[9]との談も致候事ニ御座候。拝具。

四月四日　　篤次郎

広江様

注

山口広江は文政七年（一八二四）生まれ。中津藩内で起こった上士下士の対立である御固蕃事件（従来最下層者の仕事であった門衛を下士族の仕事と変えたことによって、反発した下士族が集会し処分された）に連座して幽閉されたが、二十三歳で会計小吏として任用されると能力を発揮し、藩札の信用回復や物産会所を通じての殖産に尽力した。その功績が認められ、下士から抜擢されて勘定奉行や郡奉行を務める。維新後は民間にあって、道路開鑿事業や養蚕業に携わり、士族に支給された公債証書を元に設立された第七十八国立銀行の第一期頭取も務めた。明治三

十二年歿。

①「滞留中」

小幡は、中津市学校の閉校事務を執るため、十六年二、三月中津に滞在していた。

②「桑苗」「大龍」「豊国」

桑苗の輸送については、十九日付の山口広江宛書簡参照。「大龍」「豊国」は三菱所有の船名。

③「義社之始末」

天保義社をめぐっては、主にその資金に対する所有意識の違いから、存続か解散かで二派に分かれ騒擾が起こっていた。詳しくは前掲拙稿参照。

④「旧知事公」「先生」「鈴木氏」

それぞれ奥平昌邁、福沢、鈴木閑雲のこと。

⑤「龍王新開」

中津港近く周防灘に面した海辺。三河で「海浜新田」に植付けても害がないので、適切ではないかということ。

⑥「星野一条」「須田」

旧中津藩士星野季五郎が何か事業でもおこしていたものか。「須田」は須田辰次郎。嘉永六（一八五三）年中津生まれ。明治二年慶應義塾に入塾。中津市学校設立と同時に教師として派遣される。その後小田原英学塾や再び市学校、東京師範学校中学師範科、各県の師範学校などで教鞭をとった。また『時事新報』の編集に携わり、日本完全肥料株式会社の取締役なども務めた。

⑦「銀行条例」

国立銀行条例のこと。明治十六年五月の改正で営業期限を開設免許より二十年と定め、期限内に紙幣を消却して私立銀行に転換することになった。

⑧「佐野理八」

佐野は福島県二本松に明治六年に設立された、民間としては最大規模の設備・制度が整っていた二本松製糸会社社長。同社は富岡製糸場がフランス式であったのに対し、イタリアの器械製糸技術を取り入れ、富岡同様各地からの伝習工女も受け入れていた。佐野の長男市蔵は明治十七年十月慶應義塾幼稚舎に入学している。また同時に副社長である山田脩の長男一も入学した。入学の際小幡は、幼稚舎長の和田義郎に対して佐野の紹介状を書いている。二本松製糸株式会社については、氏家麻夫『最初に株式会社を創った人たち』（日本労働研究機構、平成五年）に詳しい。

⑨「猪飼麻次郎」

安政元（一八五四）年中津生れ。明治四年二月慶應義塾入塾。中津市学校や滋賀県立商業学校で教職についたり、三菱汽船会社や晩年は三井銀行に勤務した。明治十一年に慶應義塾塾長、十二年三月から十三年五、六月頃までは中津市学校校長を務めた。

この書簡からも、士族授産の中心事業である養蚕製糸業への深い関わりを窺い知ることができる。特に富岡製糸場と同時に、二本松製糸株式会社とも絡がりを持っていたことは、同社が生糸の直輸出計画を推進していたことを考え合わせると、注目される。

［5］山口広江宛　明治十六年四月十九日付

前略。桑苗漸く一昨十七日福島表より相達し、明廿日出帆之田子の浦丸ニて神戸へ送り、廿四日同港解纜之豊中丸ニて御地へ相届候様、手配致置候。着之上ハ運賃豊中丸へ御渡可被下候。神戸迄之運賃ハ別紙之通りニ御座候。着之上ハ、過日も申上候通り宜敷御指図奉願候。

苗木目録

苗木代価

福島より東京迄

運賃並世話料

別紙之通り

神戸迄之運賃三拾七円四拾銭

総〆三百五拾二円〇八銭

右之通ニ相成申候。小幡と申ス苗、一番気むつかしき由ニ申候。

四月十九日　　小幡篤次郎

山口広江様

義社との義ニ付、過日も逸見様迄申上、御叱も可有之候得共、今暫らく御寛恕相願度、先生始同様之考ニて、中野氏へ電報、此地ニ鳥渡上り呉候様申遣置候。何連手紙も可差上、其ニて御承知可被下候。中野辰造去ル十六日より発狂之気味ニて甚困却、中野松三郎尚又電報、上京ヲ促候。宅ニても、悴本月五日より咽喉焮衝ニかゝり、色々取込候処、此ハ一週程ニて全快、最早一昨日より稽古ニ遣候相成候ニ付、御放念可被下候。

〔封筒表〕豊前中津北門通　山口広江様　親展〔封筒裏〕東京芝区三田二丁目二番地

注

①「桑苗」

福島からの桑苗の購入については、明治十六年四月八日付斎藤武七宛桃井与五右衛門差出桑苗代受取書、十日付渡辺平五郎宛斎藤武七差出桑苗運送費受取書、同日付同人宛芳賀甚七差出桑苗代受取書、同日付小幡篤次郎宛渡辺平五郎差出桑苗送り状（四月付桑苗荷造区別帳に添付）、二十四日付山口広江宛小川弥吉桑苗送り状が残されている。小幡は「小幡と申ス苗、一番気むつかしき由」と冗談を書いているが、確かに「桑苗荷造区別帳」に「小幡」種の記載がある。またこの代金三百五十二円八銭は、前掲「市学校事務委員会録事」によると中津市学校から支払われている。

②「逸見」

逸見欄畹。中津藩時代で家老などの要職を務めた。

③「中野松三」

中野松三郎は旧中津藩士で浜野定四郎の甥。明治二年十月入塾。明治四年十一月に中津市学校が開校すると、帰郷して教員となった。但し明治十年頃までは半ば教員半ば学生の身分で、上京しては慶應義塾で学んだといわれる。明治十一年第七十八国立銀行が設立される際発起人に連なり、取締役兼支配人となった。のち大分県会議員を務め、末広会社、豊中製糸会社や、豊州鉄道会社など実業界でも活躍した。西南戦争の際に福沢が起草した西郷隆盛の処分に関する建白書には、中津士族同志総代のひとりとして名を連ね、福沢の命を請けて猪飼麻次郎と共に京都の行在所に捧呈した。

＊［4］［5］書簡および桑苗購入に関する書類の存在については山口一夫氏より教示を受け、書簡については同氏より富田

正文氏の読み下し文の提供を受けた。

四　小幡篤次郎と中津士族社会

以上紹介した書簡から、小幡篤次郎が中津の、とりわけ士族達の動向に深く関わっていた様子が推察できる。本稿では特に帰農商と養蚕製糸業に言及する書簡を取り上げたが、小幡が中津に斯く関与する理由は何であろうか。

福沢は『福翁自伝』の中で、中津のことを非常に窮屈な土地柄に描き、「如斯処に誰が居るものか、一度出たらば鉄砲玉で、再び帰て来はしないぞ、今日こそ宜い心地だと独り心で喜び、後向て唾して颯々と足早にかけ出し」長崎遊学に出発したと語っているため、中津との関係を絶った印象が強い。しかし幕末の政局にあっては、藩に対し長州征伐や洋学の導入について建言（「御時勢の儀に付申上候書付」『福沢諭吉全集』第二十巻、文久二年四月十一日付島津祐太郎宛書簡『福沢諭吉書簡集』第一巻）し、また明治維新に際して、この機会に生活の拠点を中津に戻してくれるのではないかという母や姉達の期待に応えることはなかったが、残された多くの書簡から、奥平家の資産運用をはじめ、洋学校設立や末広会社、士族達が中心になって設立した鶴屋商社の運営、天保義社の紛擾解決など様々な局面で、明治以降も中津の人々に関わり、彼らのために尽力していたことが知れる。

福沢が関わったこれらの問題は、それぞれ個別の事象ではない。例えば、奥平家や天保義社と中津市学校、田舎新聞と中津市学校、末広会社と天保義社の間には、資金の出資あるいは融通関係があり、それらの運営は密接に関係し合っている。つまり福沢は、士族を中心とする中津の社会全般と関わっていたといえる。

その理由は、彼が士族社会の変革を、日本が対処せねばならない重要な課題として捉えていたことにある。福沢は『西洋事情』をはじめ数々の著作で、欧米の政治制度や社会制度を紹介したが、その根底に「一身独立」の確立をおいていたことは、「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべし」（「中津留別の書」『福沢諭吉全集』第二十巻）の言葉が示している。「一身」の「独立」は、日本の近代化における必須条件であった。さらに「一身独立」が、経済面での自立と切り離せないものであることを理解していた福沢にとって、最も懸念されたのは、一方では国の担い手であるミドルクラスとして期待を寄せていた士族層であった。長い間の俸禄生活によって経済的自立心の乏しい士族層の意識を変革し、「一身独立」を根付かせることが、最重要課題であったといえる。

この課題に格好のモデルケースとなったのが、中津の士族を中心とした社会であった。だからこそ、福沢は明治三年に「人誰か故郷を思はざらん、誰か旧人の幸福を祈ざる者あらん」と「中津留別之書」を記して「一身独立」と洋学の重要性を説き、洋学校の設立を進め、「県内士民え文学告諭分」で学問を奨励すると共に、「中津市学校之記」を著して意識改革を促した。旧藩主奥平昌邁の名を借りた「中津市学校之記」では、特に、「一身独立」のためには自ら労して自ら食うという独立の活計を営むことの重要性を説いている。

こうした福沢と中津との関係において、小幡が重要な役割を果たしていたことが、先に掲げた小幡の書簡から窺える。従来小幡は、多分に受動的に役割を果たしたと考えられてきた。例えば『学問のすゝめ』初編は、端書に、学問の趣意を同郷の友人へ示すため書いたものを或人に勧められて出版するに至ったとあり、「福沢諭吉小幡篤次郎同著」となっているが、このことについて富田正文氏は、中津藩において上士階級に属した小幡の名をあげることによって、士族社会のどの階層にも受け入れられることを望んだ福沢の意図であり、「同著」とあ

るをもってすぐに共著と考えるべきではないと述べている。しかし逆に、小幡が単に名前を利用されるだけの存在であったのかについても慎重に考察すべきであろう。『文明論之概略』が小幡の助言によって手を入れられたことは、同著の序文や『時事新報』明治三十八年五月二十四日号で浜野定四郎が語る具体的なエピソードから知ることができる。

本稿で掲げた書簡に見られる小幡の行動は、決して受動的なものではない。彼もまた福沢と同等の意図をもって、中津の士族を中心とする社会の改革および発展に取り組んでいたと考えられよう。

五　おわりに

小幡篤次郎を考える時、切り離すことができないのは交詢社の活動である。たとえば『交詢雑誌』一一八、一二三号には、「豊紀二州巡回記行」と題する小幡の原稿が掲載されている。そこには、小幡が明治十六年二月から三月にかけて帰省した際、西国東郡で学術演説会を開き、養蚕製糸業奨励の演説を行ったことが書かれている。彼自身が地方の士族層やいわゆる地方名望家についてどのように考えていたのかを知るには、小幡の交詢社における活動を追う必要があろう。本稿では書簡の紹介に留まったが、合わせて言説を追うことによって、彼の意図はより明らかになろう。

＊人物の履歴に関する主な参考文献は、広池千九郎『中津歴史』下（明治二十四年）、山本利夫『下毛郡史』（大正元年）、赤松文二郎編『扇城遺聞』（昭和七年）、山崎有信『豊前人物志』（昭和十四年）、黒屋直房『中津藩史』（昭和十五年）。

小幡篤次郎略年譜

年（和暦）		月	日				
天保一三年	一八四二	六	八	中津藩士小幡篤蔵の次男として中津殿町に生まれる。	五十年	篤次郎	英之助	歴代
				父より四書五経を習う	五十年	篤次郎	英之助	
				藩儒野本武三、野本三太郎の両氏、藩士古宇田姑山に就き漢書を学ぶ	五十年	篤次郎	英之助	
				野本白巌が宇佐郡白岩に隠棲し、塾舎を開くに際してこれに従う	五十年	篤次郎	英之助	歴代
万延元年	一八六〇			藩校進修館に入り句読師となり師弟の教育に従事する	五十年	篤次郎	英之助	歴代
文久元年	一八六一			進修館館務を命ぜらる	（五十年）	（篤次郎）	英之助	（歴代）
文久三年	一八六三			新当流剣術、立身当流抜合を相伝す	五十年	篤次郎	英之助	
元治元年	一八六四			進修館寄宿舎の事務を執る			英之助	
元治元年	一八六四	六		進修館教頭となる			英之助	
慶應二年	一八六五			慶應義塾に入る	五十年	篤次郎	英之助	
慶應二年	一八六五			慶應義塾塾長になる	五十年			歴代
明治元年	一八六八			幕府開成所助教授（英学）に任ぜられる	五十年	（篤次郎）	英之助	
明治四年	一八七一			慶應義塾塾長を辞す	五十年			歴代
明治五年	一八七二			中津市学校創設に尽力し、初代校長となる		篤次郎	英之助	
		六		中津より帰京す		篤次郎	英之助	
明治九年	一八七六			中学師範学校（高等師範学校）創立の際校務をとる	五十年	篤次郎	英之助	歴代
明治一〇年	一八七七			欧州を歴遊、米国を経て帰る	五十年	篤次郎	英之助	
明治一二年	一八七九			東京学士会院会員に選ばれる	五十年	篤次郎	英之助	歴代

明治一三年	一八八〇		交詢社創立。幹事を務める	五十年	篤次郎　英之助　歴代
明治一四年	一八八一		東京学士会院会員を辞す	五十年	英之助
明治一五年	一八八二		時事新報創刊において尽力	五十年	篤次郎　英之助
明治一六年	一八八三	三	中津に行き、義社および市校の処分に尽力	五十年	
明治二二年	一八八九	一〇	病気療養中の塾長小泉信吉の代理となる		歴代
明治二三年	一八九〇	三	大学部を創設するにあたって、塾長に推される	五十年	篤次郎　英之助
明治二三年	一八九〇		貴族院議員となる	五十年	篤次郎　英之助　歴代
明治二九年	一八九六	三	第七回帝国議会召集の際精励を以って銀盃一組を賜る	五十年	〔篤次郎〕
明治三〇年	一八九七	八	慶應義塾塾長を辞す	五十年	
明治三一年	一八九八	四	慶應義塾副社頭となる		歴代
明治三二年	一八九九	一〇　二四	貨幣制度調査会委員として、貨幣法改正に尽力し、銀盃一組を賜る	五十年	〔篤次郎〕
明治三四年	一九〇一	一〇	慶應義塾塾頭となる	五十年	歴代
明治三八年	一九〇五	二	胃腸病にかかる	五十年	
明治三八年	一九〇五	四	胃癌がわかる	五十年	
明治三八年	一九〇五	一六	死去、広尾祥雲寺に葬らる	五十年	篤次郎　英之助　歴代
明治三八年	一九〇五	五　二〇	慶應義塾新講堂において小幡先生追悼会を催す	五十年	

号　箕田

戒名　箕田庵寅直誠夫居士

＊（　）は年代の記載がない

（にしざわ　なおこ　本塾福澤研究センター研究員〔嘱託〕）